



感情労働を伴う看護師の共感満足と共感疲労への対処に関する研究

著者	太田 真紀
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2013
報告番号	12102甲第6992号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00122637

氏名（本籍） 太田 真紀（東京都）
 学位の種類 博士（看護科学）
 学位記番号 博甲第 6992 号
 学位授与年月 平成 26 年 3 月 25 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
 審査研究科 人間総合科学研究科
 学位論文題目 感情労働を伴う看護師の共感満足と共感疲労への
 対処に関する研究

主	査	筑波大学教授	博士（工学）	川口 孝泰
副	査	筑波大学准教授	医学博士	山海 知子
副	査	筑波大学准教授	博士（保健学）	三木 明子
副	査	筑波大学講師	博士（医学）	前野 貴美

論文の内容の要旨

（目的）

看護師はケアを職とする職業である。ケアの対象である他者とケアする人との相互関係のなかに「感情労働」が生じると言われる。感情労働は「自分の感情を誘発したり抑制したりしながら、相手の中に適切な精神状態を作り出すために、自分の外見を維持する」努力と定義されている。看護師は「病い」を抱え、健康な心身の状態ではない人を対象とし、また対象の生死を身近に扱う職業であるという特徴がある。そのため、労働上の特性において、感情の管理が求められる局面が多く、そのために共感疲労を起こしやすいことが指摘されている。

そこで本研究は、看護師の感情労働に対処するための支援に必要とされる要素を、共感満足・共感疲労の視点から明らかにすることを目的とした。

（対象と方法）

本研究は、看護師の感情労働の対処の実態を質的に検討する【研究 1】、および共感満足・共感疲労への対処に、「情動知能」を活用する仮説を、量的に検証する【研究 2】により構成されている。

研究 1 では、看護師の感情が揺さぶられるような場面への対処の実態を明らかにするため、総合病院に勤務する職業経験 10 年以上の看護師 12 名を対象に、半構造化面接調査を行った。面接内容における質問項目としては、「日常の臨床業務における感情労働について」、「感情労働の認識について」、「感情労働への対処方法について」等について尋ね、質的記述的分析を行った。

研究 2 では、看護師の共感満足の向上と共感疲労を低減する方策として関連性の高いと考えられてい

る、「情動知能」が及ぼす影響を明らかにすることを目的に、病床数 400 床以上の総合病院（関東地方の病院 2 施設、東海地方の病院 1 施設）に勤務する看護師 1,490 名に質問紙を配布し調査をおこなった。調査方法は、情動知能及び共感満足および共感疲労に関する質問紙調査を実施し、情動知能との関連性について統計分析し、看護師の感情労働への関連要因について検討した。

（結果）

【研究 1】

看護師の感情労働への対処について分析した結果、【学ぶ】、【入り込む】、【役割を自覚する】、【共有の場を活かす】、【切り替えの工夫をする】、【倫理的な問題に対峙する】、【生命と向き合う責任感をもつ】が中心的なカテゴリーとして抽出された。とくに感情労働の局面として、「看取りの場面」、「ケアの選択に接する場面」、「怒りに対する場面」が特徴として挙げられた。

【研究 2】

質問紙調査における回収率は 72.4%（回収数 1,079 部）であった。そのうち質問項目全てに回答した 1,009 名を対象に分析を行った。その結果、情動知能と共感満足には、正の相関関係（ $r=0.59$, $p<0.001$ ）がみられた。しかし一方で、情動知能と共感疲労は有意な相関関係は、みられなかった（ $r=-0.06$, $p<0.061$ ）。相関分析の結果を受け、従属変数を共感満足、独立変数を情動知能として重回帰分析を行った結果、情動知能は、共感満足との関連が確認された（ $\beta=0.571$, $p<0.001$ ）。

（考察）

【研究 1】

看護師の感情労働への対処には、患者に対応する際の対処のみならず、倫理的な課題への対処が必要とされることが明らかとなった。医療の選択において、看護は調整者としてかわる役割を果たす。患者の自律性の程度が不明な場合、患者本人の QOL を考察する際に何を基準に、また何を指針としてよいかは困難な課題であり、この状況に対応するためには、組織的な支援体制が求められる。

【研究 2】

情動知能と、共感満足および共感疲労との関係を分析した結果、情動知能は、共感満足との関連がみられた。このことにより、他者の感情に関する認知や共感をベースに、他者との人間関係を適切に維持することのできる能力である「対人対応」、集団を取り巻く状況に応じて能力を使い分ける統制力である「状況対応」が、それぞれ共感満足に関連していたと推察される。情動知能は、教育や学習を通して改善・習得されるものであり、看護における感情労働への対処法の一つとして期待される。

また一方で、情動知能は共感疲労との関連はみられなかったが、情動知能を独立変数として分析を実施した場合、共感満足との関連性が確認できた。この結果から、看護師の共感疲労では、自己認識を効果的に行い、人間関係をはじめとする環境への適応や、その対処を促すような、情動知能以外の因子も効果的に活用することの必要性が示唆された。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究により、看護師の感情労働への対処法として、情動知能の活用により、共感満足の向上につながる事が明らかとなった。この結果は、今後の看護管理・教育などへの還元が期待される。また共感疲労については、情動知能からの対処のみでは不十分であることが確認された。今後の看護師の共感満足・共感疲労からの対処方策として、自己認識を効果的に行い、人間関係をはじめとした環境への適応や対処に配慮し、情動知能を高める努力を行うと共に、個人では対処ができない課題を支援する組織的な取り組みの必要性が示唆された。

平成 26 年 2 月 4 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（看護科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。